

注意集中と動作の単純化に焦点を当てたアプローチによって — 一連の起き上がり方法を再学習した脳血管疾患患者の一例 —

熊谷 理恵* 長野県看護大学看護学部
小田 和美 長野県看護大学看護学部

左視床脳出血で入院後1ヶ月ほど経過していたが、ADLの拡大が図れていなかった77歳の男性への関わりを振り返った事例である。関わり当初は発熱や倦怠感などによって日中のほとんどを臥床している状況であり、自力で寝返りや起き上がりができず座位も安定していなかった。また、軽度の意識レベルの低下と認知機能の低下が存在していた。そのため、適切な起き上がり方を習得できるように関わることで、体力や筋力の低下を最小限にとどめること、バランス感覚を向上させることに着目し、理学療法士と同じ順番で接することにした。また、理解に合わせた指示の仕方をして記憶力の向上、動作の順番を思い出せるように働きかけた。さらにバランスを保持できる姿勢を意識的にとれるように言葉で姿勢の修正をした。その結果、適切な順番に基づいてほぼ自力で座位になり、1時間位の端座位を保持でき、お茶を飲むなどの動作も安定して行えるようになった。以上のことから、適切な起き上がりの順番や座位保持のポイントを患者の状態に合わせて、その方法を修正してから伝えること、身体や環境の状況を整えることなどによって、適切な動作の順番を記憶すること、座位の保持、筋力や体力の維持向上、ADLの拡大、自尊心の向上が図れることが示唆された。

キーワード ⇒ 注意集中, 認知, 動作の単純化, 記憶, 脳血管疾患